

2014年2月17日 首都大学東京
日本社会教育学会60周年記念
研究会

日本からの報告

育まれてきた村を捨てない力の今(飯舘) 千葉悦子(福島大学)

東日本大震災・原発事故が社会教育 に問いかけるものはなにか

*「持続可能な社会づくり」というときに「原発問題」が視野に入ってなかった。

公民館・社会教育は「原発問題」をとりあげてきたか。

*防災・減災教育は？

報告では、3.11以後の福島・飯舘村の自治体・住民の取り組みから、社会教育の課題を問う。

本日の報告の柱

1. 東日本大震災から3年あまり
どのような問題が発生しているのか
原発事故の特異性
2. 被災当事者・支援者の多様な取り組み
3. 村をあきらめない人々の共同実践と学び

1. 東日本大震災から3年あまり 福島・原発災害の特異性

○広域避難 県内・46都道府県に散在
避難者数が減らない
県外から県内へ

○子どもは県外へ * 母子避難

○避難の長期化

→帰還困難区域(5年以上)、居住制限区域、避難指示解除準備区域

○避難先の多様化と孤立

仮設住宅、民間借り上げ住宅による「みなし仮設」

* 富岡・仮設 郡山(4)、三春(8)、大玉、いわき(4)

○家族・コミュニティが引き裂かれる

家族類型別の变化

震災前は核家族 → 離散21.1%

震災前は三世代家族

→ 離散48.9%

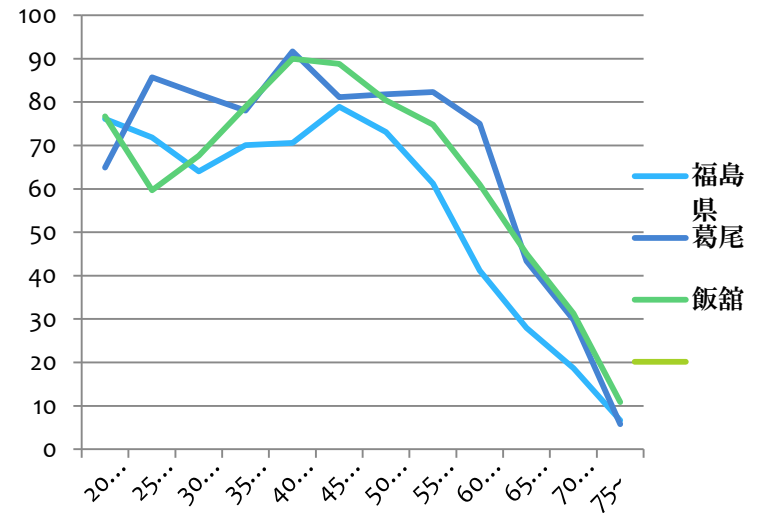
福島大学災害復興研究所編『双葉8町村復興
実態調査基礎集計報告書』2012. 2. 14(改訂版)

○仕事を失う

@失業は女性 > 男性
@自営 > 雇用者

会社員3割、自営業6割、
パート・アルバイト8割(多くは女性)
福島大学災害復興研究所2011年9
月実施「双葉8町村住民実態調
査」

女性就業者の比率(2010)



東日本大震災・原発事故がもたらした もの



**自分たちを育んだ地域の自然・文化・
社会関係資本が根こそぎ奪われた**

被災自治体の復興、住民の生活再建の課題

○避難の長期化、帰還の見極めができない

「帰還する」「帰還しない」の選択の困難さ

賠償、除染、ライフライン、仕事、医療・福祉

“戻る”……………“戻らない”

「…なら戻る」というグレーゾーン

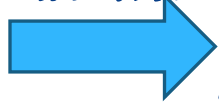
○住民の間の分断・対立

避難者、避難しなかった者、自主避難者、補償を受け取っている人、受け取っていない人、県内避難者、県外避難者、母子避難者

@避難の限定化、自主避難＝自己責任、帰還施策優先
(戸田典樹)

○被災者の孤立

◎福島県の食と農の再生の課題



性差、地域差、世代差を伴いながら

2.被災当時者・支援者の多様な取り組み

2-1. 自治と交流の広場づくり

ビッグパレット(郡山市)

2500人(川内・富岡住民)がひしめきあう

無秩序。混乱・ノロウイルス患者発生



県社会教育主事と市町村社会福祉協議会の連携で生活支援ボランティアセンター「おだがいさまセンター」立ちあげる(2011年5月1日)

避難経路図作成、名簿作成、生活スペースづくり

自治会立ち上げ、サロン(喫茶)

女性専用室、足湯

～避難者の自治活動のサポート

～傾聴ボランティア



喫茶コーナー

(写真:天野和彦提供)

2-2. 市民による除染の共同の取り組みと学習

専門家、政府、マスコミへの不信感、自治体による対応の違い

「本当のことを知ろう」とする住民の学習

避難できない親たちの子どもを放射能から守ろうとする取り組みの広がり

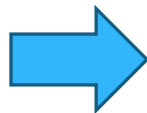
校庭除染一

親たちが行政を動かす

2011年4月26日【郡山市教委】
小中学校85の屋外活動1時間
以内、部活動2時間以内、4月
27日【郡山市】校庭表土除去
開始・86小中学校、39幼稚園、
13保育所の校庭表土除去

5月14日福島市表土除去29校・
園で実施

7月2日福島市小学校通学路除
染



2-3食と農の再生を目指す生産者の 挑戦

農産物の放射能・全量検査

農地の放射線マップづくり

地元大学と生産者の協働調
査・研究

「放射能からきれいな小国
を取り戻す会」「ゆうきの里
東和ふるさとづくり協議会」
「ふくしま土クラブ」

2-4 「放射能」を学ぶ 女性と子どものための“放射線と健康”セミナー(県男女共生センター)

講演と茶話会 * 女性団体との共催

講師：蜂谷みさおさん

(写真：福島県男女共生センター提供)



講演の感想や震災・原発について
語る茶話会

《参加者の声》

他の参加者の意見を聞くことができ、大変参考になりました。

インターネットや本などを見ていると、色々異なることが書いてあるので不安でしたが少し気持ちが楽になりました。

子どもへの影響について、もっと知りたいと思いました。

* (『未来館News臨時版vol.3』より)

2-5 支援者・支援団体の多様な取り組みとその発展

記録化、交流・イベント

***女性団体・組織の日頃の蓄積を生かして**

@被災体験を語る

孤立した避難者をつなぐ、

***同じ思いの人々が新たに
つくる**

子どもたちの保養

***ピアサポート**

傾聴ボランティア

3. 村をあきらめない人々の共同実践と学び

飯舘村に計画的避難指示(2011年4月11日)

- * 若妻の翼
- * 市町村合併の拒否
- * 住民参加型村づくり
- * スローライフ=ままでの村づくり



貧しいが、豊かな自然と農の営みによって生かされてきた生活
が根こそぎ奪われた
共助・自助の暮らしの崩壊

◎村民の生活と命を守る村の挑戦

(飯舘村全村見回り隊詰め所)

行政の全村避難指示 への対応

安全とともに安心を
車で1時間圏内への集団的避難
特例の要求

村内事業所と特別養護ホームの存
続。全村見守り隊の組織化

「二重の住民票」

住民の意向に基づく避難先確保



避難生活を支える コミュニティ

避難先での新たなコミュニティ づくり

女性管理人、自治会たちあげ、温泉交流のイベント

→高齢者のための生きがいつくりからスタート、そして「仕事」づくりへ

旧コミュニティ(行政区)の維持

旧コミュニティ(行政区)の維持

全村見守り隊は行政区で

行政区ごとの集い

行政区単位の避難地域の再編

* * S地区では連絡簿作成

子どもの教育環境の整備

- * 子どもたちの生活と健康を守るため学校を川俣町へ
(2011年3月決定)
- * ↓
- * 仮設校舎の建設
- * スクールバスでの通学・通園
- * (2013年3月 中学校7割、小学校6割、幼稚園5割)

- * 国内外への研修旅行
- * 放射線教育

「村の復興」ではなく「村民1人1人の復興」

「までいな希望プラン」(2011年6月)

庁内検討会議(2011年8月～)

「いいたてまでいな復興計画」村民会議(2011年10月、2012年1月第一版)

「いいたてまでいな復興計画推進委員会」(2012年2月、6月2版)、(2013年12月、2月3版)、(2013年9月～)

* 庁内検討会議

30~40代職員中心、ランチ ミーティング

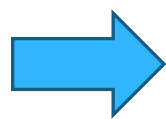
* 村民参加型計画づくり



村の復興計画ではなく村民の計画
帰村のための村内拠点整備
村外子育て拠点の整備

しかし、除染が進まない。 放射能の捉え方の個人差・世代差

- * 「いつ戻れるのか」
- * 「子どもたちが戻らないのに、年寄だけ戻っても」
- * 「なにもすることがない」
- *



働く意欲の薄れ
要介護者の増加

* 先の見通しのもてない
苛立ち、諦めの声

* 村行政への不信感・疑問の声も

◎村民が一步を踏み出す

参加型村づくりで培ったものを基礎にした多様な地域づくり集団の形成

◎若者とベテラン層による住民組織「負けねど飯館」
＝

「子どもたちを守ろう」とSNSで発信する若者

ポスト「夢創塾」を指向するベテラン層(＝住民主体の村づくり組織を)

2011年4月・5月「村民集会」開催

村民向け瓦版発行

健康手帳作成、放射線防御のための学習

◎女たちの生きがい・仕事おこし

(写真:かーちゃんのカ・プロジェクト協議会提供)

2011年10月阿武隈地域の女性
起業「かあちゃんのカプロジェクト」スタート

培ってきた技術を活かして
ふるさとの復興へ

- ・女性起業者の協働
- ・地元大学「小規模自治体
研究所」のサポート
- ・県内外のNPOの支援・連携
- ・リーダーW氏の村への思
い・・・「飯舘発品種をつないで
いきたい」



Wさん

「地域づくりや合併にかかわりながら自立を考えるようになり
ました。あえて困難な道を進んできましたが、さまざまな関わり
があったから、さまざまなことを自分で考えることができました。
あきらめないで、一步を踏み出すことができました。・・強い
風は誹謗中傷で、それを恐れていると高い目標はもてない。
強い風は試練と思って諦めないで進んでいきたい。」「この人
が得意なんだと分かったら、その人に任せる。それが生きがいと
なる。やってみたいという声を聞きながら作り直すことが大事だ
など、かーちゃんのカプロジェクトをやっています。どん底を味
わってきたから、誹謗中傷をいう人の気持ちもわかる。自分は
いかされたんだと、光をあててあげることが大事です」。

* 座談会 自治による再生の可能性 『東日本大震災と社会教育
3/11後の世界にむきあう学習を拓く』国土社、2012)

◎土をもとに戻したい

村外の協力者(研究者)と除染実験を続けるKさん

「除染の実験・・・いや農業再開への検証だ。復興するには先ずはじめなければ」・・・はっきりした目処がたたないやるせなさ。・・・「決して、希望は失っていない」

(『続 までの力』シーズ出版)



「土を戻したい」村民との協働へ

世代をつなぐために土を戻したいKさん

「義父は(避難先では)することがないので、放射能で死んでもいいから(飯舘村に)帰るといいます。長男は土壌は諦めろ。除染しなくても30年経ったら住めるから・・・無駄だからやめろと言います。でも、私はこう思ってます。子どもが帰ってこれるようにしておくのが親の役目だから、私は帰る。畑があるから、家があるから帰る、と。両親を元気で飯舘に還すことが自分の仕事。おじいちゃんには今までと同じにはならないよ、と言っている。」

世代をつなぐために土を戻したい

Kさん

「夫は品種改良、義父は「森の名人」です。

「義父は(避難先では)することがないので、放射能で死んでもいいから(飯舘村に)帰るといいます。長男は土壌は諦めろ。除染しなくても30年経ったら住めるから・・・無駄だからやめろと言います。でも、私はこう思ってます。子どもが帰ってこれるようにしておくのが親の役目だから、私は帰る。畑があるから、家があるから帰る、と。両親を元気で飯舘に還すことが自分の仕事。おじいちゃんには今までと同じにはならないよ、と言っている。」

◎若者たちの対話と学び直し

「ふるさとを学び直す」試み

- ～原発によって奪われたものはなんだったか
- ～「親父たち世代」がつくってきた村をあらためて知る
- ～親父達の思いを知る

KYさん 飯舘から避難して北海道の牧場で

私は飯舘村を誇りに思います。小さい頃から、親父さんが仲間と協力しながら作業する姿に憧れをもっていました。そして、親が大学にまで行かせてくれたおかげで、私は飯舘村を客観的に見つめ直すきっかけを得ました。また、住民投票で平成の合併を蹴り、自分たちで自立した村を創るという風土やユニークな政策を知り、いいところに育ったという思いを強くしました。帰郷後は飯舘村の第五次総合計画の中間見直しの委員会に参加させてもらい、親父たち世代の思いを学ぶ機会にも恵まれました。

原発事故に遭い、飯舘村のために何かできないかと思うのは、村への感謝と、親父たちへの尊敬の念があるからです。しかし親父たちは村を思うあまり、自分たちだけで責任を被っているのも事実です。その責任を若手にも少し担わせてくれないかというのが私の思いです。(季刊 地域 2012,夏「飯舘村の一人の青年として村のためにできること」)

おわりにかえて

原発事故のもつ不条理

絶望的な状況の中で「希望」に向けた学びあい、語り合い、
協働の取り組み

～土への思い、世代をつなぐ

～女性、ベテラン層、若者

個人・組織の村内外のネットサークル

村を捨てない人々の存在

「非常時」にも平常時の力が発揮される

村づくりの中で培ってきた力

しかし、私たちはだかるものは大きい

・長期避難者の生活再建の課題

- すまい、就労自立、家族の再構築、まち(村)づくりの参加
- ・希望をかたる場とそれをかたちにする実践をどのようにして作り出すのか

行政、村民間の対話の場づくり

「戻らない」選択をした村民を包含した施策

避難者と

・周辺住民との連携・協働の課題

- ・いまだ原発事故は収束していない、「再稼動」へ向かう政府
- ・飯舘・フクシマの問題を私たちの問題としていくことの課題